

はじめに

歯科医療の目的は、口腔の健康維持と回復にあるが、近年では、歯周病と全身との関係や咬合と全身との関係など、口腔が全身と深く関わっていることが科学的に明らかになり、その目的は、口腔という局所から全身の健康維持へとパラダイムシフトが起きている。すなわち、口腔が清潔で、自身の歯でよく噛めることが、全身の健康維持にとって重要だということになるわけだが、実際には歯の平均寿命は、咬合の鍵となる下顎第一大臼歯で男性約55歳、女性約52歳、審美の鍵となる上顎中切歯で男性約62歳、女性約61歳程度と人の平均寿命よりかなり短い（文献1）。歯科の二大疾患である、う蝕と歯周病が感染症であることを考えると、なぜこんなにも感染をコントロールできないのだろうかという疑問が生じる。何に問題があって歯は寿命を迎えるのか？

どうすれば歯の寿命を延ばすことができるのか？ その問いに答えを出すことによって、我々臨床医は、患者の健康長寿に貢献できることになるはずだ。

本書は、一口腔単位で治療を行うことを前提にして、患者利益に通じる治療とは何かについてまとめた。歯の寿命を延ばすためには質の高い治療が不可欠で、さらに治療行為が患者利益に通じるものでなくてはならない。I章では、患者利益をもたらす質の高い治療を実現するために何が必要か、私が考える基本理念をまとめた。

II章では、その基本理念に基づいて行われる実際の臨床に関して、難症例の一つである上顎前歯フレアアウトという現象の原因を考えることで、下顎第一大臼歯欠損から無歯顎に至るまでの一つのストーリーを構築して、それぞれのステージで考えられる治療の選択肢とリスク回避についてまとめた。

またIII章では、患者利益の大きい治療をもたらすために必要な「マルチディシプリナリーアプローチ」の概念を実現するための当院の取り組みを紹介させていただいた。

治療の出発点となるのは、常に「正しい診断」である。正しい診断なくして効果的な治療は生み出されない。しかしながら口腔内の環境は過酷で、正しい診断のもとに時間をかけて丁寧に行った治療であっても、予後に問題が生じることは少なくない。治療にはリスクがつきものだ。特に、機能回復の本丸となる「補綴治療」の多くは不可逆的なため、可能な限りリスクを回避した治療、リカバリーできる治療の選択肢を考えなくてはならない。

本書では、安全・安心・確実な治療を行うための「正しい診断」、「患者利益を追求した治療」「低侵襲治療」「矯正を取り入れたマルチディシプリナリーアプローチ：Multidisciplinary Approach」「矯正医とのインターディシプリナリーアプローチ：Interdisciplinary Approach」などをKey Wordsにして、リスク回避のための治療の選択肢をディシジョンツリーに示した。それぞれのディシジョンツリーでは、選択肢だけでなく、治療の効果が観られないときでも、どの手順に戻ればリカバリーできるか理解できるように工夫した。

質の高い一口腔単位の治療をおこなうためには、あらゆる分野に精通しなくてはならない。その道のりはあまりにも過酷に思える。しかし、目標を達成するためのハードルが高いからこそ、歯科臨床は面白いのかもしれない。本書をまとめることで、私自身の臨床を振り返り、反省し、修正することができた。臨床に完璧を求めることは難しいが、少しでも目標に近づくためには、常に患者の悩みに寄り添い、研鑽という努力を続ける以外、道はないと思う。

本書が、日々の臨床の悩みをわずかでも解決できる一助になれば幸甚である。

平成29年3月

渡辺隆史